

信心獲得へのみちゆき

ご議題 一、「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。きくといふは、本願を聞いて疑ふころなきを「聞」といふなり。またきくというは、信心をあらはす御のりなり。「信心歡喜乃至一念」といふは、「信心」は、如来の御ちかひをききて疑ふころのなきなり。 (Ref「一多証文」註釈版聖典 P677)

二、南無の言(ごん)は帰命なり。(中略)ここをもって帰命は本願招喚の勅命なり。発願回向といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行といふは、すなはち選択本願これなり。 (Ref「大行釈、六字釈」註釈版聖典 P170)

一、型から入る日本文化

およそ道と称される日本文化は型から入るとされます。

茶道、華道等の芸事、柔道、剣道等の武道等枚挙に暇がありません。

技術者の技術は先輩から盗めと言われます。

教えてどうなるものでもないその奥義はいずれも目に触れる形から入ることを教えたものであります。

身体を通して覚え込ましてもらされた結果を確認するという、奥義に迫る最も確かな方法論であります。

昔、高校一年のときの今は亡き数学の先生が私たち生徒におっしゃったことです。「問題を解く力は繰り返し演習問題に接してこれを解くことによって自ずから身に付く。だから演習は大事だ」と。先生は野球部の部長でもあらせられたから、こういうお警えをお示しになりました。

「外野フライの取り方の説明を聞いて判ただけでは外野フライを取ることはできない。繰り返し練習して体に覚え込ませなくてはならない」と。

この一点においてスポーツ、勉学で差はありません。

「型から入る」方法論がいかに大切かがこれで知られます。

「型から入る」とはどういうことかと尋ねてみますと、仏教でいう「身口意(しんくい)の三業(さんごう)」のうちの身業(しんごう)(口業(くごう)も身業の一つ)であることに気づきます。

野球選手は、自らの投球フォーム、バッティングフォームを鏡に映して確認することはよく知られています。

面白いことに口業は身業でありながら、口に出したものは自らの耳に聞こえるという不思議な効果をもたらします。

一方、意業(いごう)は、心の行いであって、外観することができません。

型から入る仕方が問われる所以であります。

二、浄土真宗の信心獲得の性格について

浄土真宗は、阿弥陀如来より本願力回向されたお名号による救いです。衆生(私)の救いは信心一つで定まります(「信心正因」)。

如来の勅命(仰せ)を疑えば、浄土往生の正因が定まらず、従えば浄土往生の正因が定まるからです。この分かれ目を法然聖人は「信疑決判(しんぎけつばん)」と称されました。

「信心は、如来の御ちかひをききて疑ふころのなきなり」からも確認できる通り、「信心」とは「無疑心」であることがわかります。

三、信心獲得に際して型から入ることは可能か

信心は「無疑心」ですから信心獲得は意業に見えますが注意が必要です。なぜなら、ご開山は「私が疑わない」とおっしゃらず、衆生の意業を超えた「疑う心がない」という表現をされるからです。

では、古来、信心獲得の型はどのように捉えられたのでしょうか。

思えば、浄土真宗で伝統的に大切にされた「お聴聞」が信心獲得に際

しての型に当たるのだと見られます。

なぜなら、「本願を聞いて疑う心がない」のを信といい、聞というからです。ここから「聞即信(もんそくしん)」が導かれました。

では「聞即信」でどのような効果をもたらされたのでしょうか。

お聞かせに与ったまま頂戴することを「信」として、信心に無用の要素(これを自力の計らいと称する)が入り込むのを避ける効果が第一点。

更には「聞即信」と「信」を「聞」と捉えることによって信心獲得の具体的な道行を示されたのだと見られます。これが第二の効果であります。

聞ならば型を示すことができます。それが「お聴聞」です。

そうすると、一たびのご法座で判ったから十分ではないのです。

高校生の数学ばかり、野球部の練習ばかり、繰り返し繰り返し体を通して刷り込ませることによって獲得できる真実があります。

繰り返しご法座に歩みを運ぶ「お聴聞」を通して、やっと「信心獲得」が可能になるのです。およそ「道」といわれる日本文化は凡夫が嘗む型から入って凡夫の三業を超える奥義に迫ったのであります。

浄土真宗も仏道という道です。仏道ならばこそお聴聞という型を崩してはならないということになるのであります。

四、信前行後の伝統教学は得策か

二百年前の三業惑乱直後の問題意識に立脚する伝統教学は、信前行後の教学的立場をとり続けています。親鸞聖人の教行信証(ご本典)における教学は行信一具の法門ですから信前行後の教学は実は親鸞聖人のみ教えではないことは明らかですが、ここではこれ以上触れません。

代わりに、信心獲得が先で、念仏は信心獲得後の報恩感謝の念仏に限るべきとする伝統教学の立場が信心獲得において得策かという視点で考えてみることにします。

そうすると「お聴聞」というプラクティスがままたらなくなった今日、信前行後の伝統教学はおよそ「道」という日本文化を獲得する方法論に違背している点で得策ではないのではないのでしょうか。

これがまず一つの結論であります。

ではどうすればよいのでしょうか。

五、名号のいわれの通りに聞くのである

「聞即信」を押える「聞信義相(もんしんぎそう)」において明らかにされた「名号の謂れの通りに聞くこと(これを「如実の聞(にょじつもん)」という)の意義を再確認すればよいと考えられます。

「名号のいわれ」は「六字釈」(註釈版聖典 P170)に明らかです。

「六字釈」でご開山は、「南無」には「帰命」と「発願回向」の二義があり、「帰命」は、本願招喚の勅命なり、「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり」とお示しです。

よって、行信一具の法門として、まずは「南無阿弥陀仏」と称えるのです。すると、「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。

聞こえて下さったものは「如来様直々の御喚び声」と頂戴するのです。お喚(よ)び声によって愚かな私が喚び覚まされるときが疑いの蓋がなくなる信心獲得のそのときだからです。

凡夫の身口意の三業(さんごう)を超える信心獲得へのみちゆきがこうして明らかになることであります。南無阿弥陀仏、合掌(玄宥記)。

正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六
☎-ℓ mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥